

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372401077		
法人名	有限会社 はる		
事業所名	グループホーム はる		
所在地	熊本県玉名郡玉東町西安寺302-1		
自己評価作成日	平成26年10月27日	評価結果市町村受理日	平成26年12月26日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	平成26年11月11日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

豊かな自然の中で、皆さん明るく元気に過ごされています。
畑で季節の野菜などを収穫したり、散歩に出かけたりして、季節を感じて頂いています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

緑と花に囲まれて、一年中春のような生活ができるように命名された『グループホームはる』の明るいリビングホールでは、入居者と職員の声の弾み、まさに『自分らしく笑顔で暮らす家』となっている。開設から10年を祝った本年、協力医もメンバーとして参加する推進会議の中で、祝いの言葉やこれからの10年にも期待をしたいとの、心温まる言葉が寄せられている。このことを代表者をはじめ、管理者・職員が励みとしてこれからのホーム運営にあたりたいという真摯な思いが伝わってきた。食事の準備や片づけなどにエプロンをつけ手際よく奮闘される入居者や、お茶がこぼれたことでも笑いが飛び出すホームの雰囲気は実に温かいものであった。また、食事のテレビ鑑賞は賛否問われることもあるが、屋の番組を楽しみにされている方々には、テレビに向けてテーブルが配置され、会話をしながらの食事の様子は家庭の団欒と同じであり入居者の表情が満足を物語っていた。これからの10年も『はる』にできる取り組みに期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	勉強会など、事あるごとに、理念を振り返る機会を設けている。 理念を共有するよう意識付けに努めている。	パンフレットへの記載やホーム内に掲示された『はる理念』は、 人生の先輩としての尊厳を守る ことや 地域とのふれあいを大切に することなど6項目を一つにまとめあげている。管理者は、日頃から認知症である入居者の支援について何が必要かを伝えており、勉強会をはじめ機会あるごとに振り返りを行い、理念に沿ったケアについて意思統一を図っている。	開所時からの理念は、ケア規範として職員間で共有が図られている。今後は開所時から継続されている理念が、入居者支援の充実に繋がるよう、年や月目標などの設定も一案と思われる。また、引き続き家族や推進会議の中などホームの良き理解者へも啓発されていくことに期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	月一回、ホームに地域のお寺の住職さんに法話に来てもらったり、地域の行事に参加させてもらったりして、地域の皆さんと交流させていただいている。	立地面から地域住民との身近な交流は困難な面もあるが、散歩時には積極的に挨拶を交わしている。周辺の畑や果樹園所有者より、収穫物の頂き物を受けることもあるとのことである。また、町主催のイベント(夏まつり・敬老会・福祉まつり)への参加は、知人との再会の機会にも繋がっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	行政の依頼で、認知症サポーター講座などの講師を務め、地域の皆様への認知症の理解を深めて頂けるよう努力している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	毎回、入居者の皆さんの生活状況などを報告し、参加者の皆さんから、様々なご意見を頂いている。	定期的に行われる会議は、地域代表者や行政、家族会代表者と共に、協力医がメンバーとして参加されている事は大きな特徴であり、医師の立場や時には家族、ホームの立場に立って意見や提案を受けていることに、管理者は感謝を語っている。会議の中で、10周年を迎えたホームへ、「継続の難しさを感じながら、頑張ってくださいね！」「これからの10年も続くように頑張ってください！」など、温かい言葉が寄せられ、代表者・職員は心新たにスタートしている。	ホームには毎月地域のお寺ご住職が法話にいられているようであり、機会があれば、推進会議へも参加を依頼することで新しいサービスの向上に繋がると思われる。また、会議の会場が別の場所であることから、今後はホーム内の様子を見てもらう機会を作ること、話しも深まると思われる。会議録はわかりやすくまとめられており、参加されていない家族への開示方法も検討頂きたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	サービスや研修、更新などの情報を教えてもらっている。 ホームの空き状況などをお伝えしながら、協力をお願いしている。	行政担当者とは推進会議の席に限らず、日頃から研修や更新の情報、空き情報を伝えながら協力を依頼するなど良好な関係である。また、管理者は認知症サポーターやシルバーヘルパー講座の講師依頼に応じ、自身の資格や経験により地域へ認知症の理解と協力を発信している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	管理者と職員が話し合い、身体拘束のないケアの実践に取り組んでいる。	身体拘束についてはケア会議などで周知徹底を図り、転倒があるとベッド柵になりがちだが、管理者は柵に頼らない支援を指導している。また、センサーでなく鈴での対応など工夫しながら入居者の安全管理に努め、言葉による拘束についても気になる場面があれば適宜指導が行われている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	勉強会などは実施していないが、入居者の気持ちを大切にケアを行うように声かけしており、虐待などないよう、スタッフ同士で声を掛け合っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、2名の入居者が後見人制度を利用しており、必要に応じて連絡を取っている。権利擁護に関する制度の学びがこれからの課題。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書・重要事項説明書などを使用し、説明を行い、同意を得ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	重要事項説明書にホーム内の苦情窓口と外部の苦情申立機関を入居時に説明している。 また、ご家族の面会の時にスタッフから声かけし、話をしやすいように促している。	入居者の中には要望などを伝えられる方もおられるが、そうでない方もあり、職員は好みのメニューや何かやってほしいことはないかなど、返答しやすいように投げかけている。家族の意見や提案は、入居支払いを持参としており、その際に近況を伝えながら要望などを確認している。受診同行についての相談には、家族状況に応じホームで支援するなど柔軟な対応が図られ家族の安心に繋がっている。入居時にはホーム内・外の相談窓口が説明されている。	入居者や家族から話しやすい雰囲気や環境に努めていることが確認された。今後は苦情の記録に限らず、相談や家族からの感謝の言葉なども残すことで、職員の励みや更なるサービスの向上に活かせるものと思われる。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月、スタッフ会議を開催し、代表・管理者ともに参加し、スタッフの意見等を出し合えるよう努めている。	代表者も参加する毎月のスタッフ会議の中で職員の意見や提案が確認されている。ケアの方法や必要な物品の購入など要望が出され、新しいタオルへの交換など身近な問題へは早急な対応が図られている。管理者は代表者と連携し、職員が働きやすい環境の整備に努め、会議の中では代表者より職員の日頃の取り組みへの評価が伝えられ励みとなっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	会議の度に代表より、スタッフの働きを評価してもらっている。 勤務について、各スタッフの事情に配慮し、安心してケアを行えるように努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	ホーム内で2カ月に一回、勉強会を行い、スキルアップに努めている。 事務所内に外部研修の案内を掲示している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	2か月に一回、地域密着型サービス連絡会の玉名郡支部会に参加し、他のグループホームとの交流を深めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居後に、本人の様子を観察したり、不安に思っていることや希望を直接尋ねながら、少しでも安心した生活が送れるように支援している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居時の契約の際に、ご家族にお話を伺っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	状態の変化に応じて他のサービス等を検討している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常生活の中で、スタッフと入居者が一緒に家事を行い、お互いに助け合える環境になるように努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	事あるごとに御家族に連絡を取り、入居者本人の事を相談している。 面会時に現状を報告・相談している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の以前から行きつけの店や美容室があれば、スタッフ付き添い外出している。 買い物の時は、一緒に地域のスーパーに行くようにし、地域とのつながりを大切にしている。	みかん山に囲まれたホームは、入居者に心落ち着く馴染みの環境である。買い物は地域商店を利用することで、知人との再会にも繋がっている。理美容支援についても、これまでの行きつけの場所があれば、職員が同行し安心して施術を受けてもらっている。また、親類などにも会える盆や正月の帰省は、我が家に帰れることで入居者も楽しみに待たれている。	入居者にとって馴染みの人や場所に加え、今後は趣味や特技、こだわり等を収集し、可能な限りの支援に努めていきたい。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日々の様子を観察し、孤立しそうな方がいれば、スタッフが間に入り入居者との関係を支え合えるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ホーム退所後も情報提供など、その後のフォローに努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の日頃の訴えや希望、心身の状況をもとに、ケア会議にてスタッフ全員と話し合い、本人本位のケアの実現に努めている。	入居者の担当職員が中心に日頃接する中で、思いや意向を確認したり会議の中で他の職員からの気づきなどが出されている。理念にある、“その人らしい生活”を支えるために、職員は常に本人本位の支援を検討している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の情報と、入居後の本人とご家族からの話をもとに、これまでの生活歴などの把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々のケアの中で、お一人お一人の状態などを観察しながら、ケア会議の際に、スタッフみんなで話し合い、できることを支援するように検討している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日頃の御家族、主治医、訪問看護師の意見などをもとに、ケア会議にて、スタッフ全員で話し合っている。	本人や家族、主治医・看護師など入居者の支援に必要な関係者とは日頃から情報交換に努め、よりよいサービスに繋がるプラン作成に活かしている。見直しは半年や一年以内に行い、必要があればその都度検討し、状況に応じたものとしている。家族の説明にあたって計画作成担当者は、合間あいまで確認や質問を受けながら分かりやすく進行し了承を得ている。	計画作成担当者は認知症ケア専門士でもあり、日頃から専門性活かしたケアに真摯に取り組んでいる。今後は記録に関する勉強会等を開催し、全職員の意識やレベルアップに繋げていられることに期待が持たれる。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	スタッフに詳細な記録の充実を促している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者の状況に応じて、医療保険による訪問看護や、福祉用具レンタルなどを利用している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のお寺から月一回法話に来て頂いたり、理容店に散髪に来てもらい、地域の皆様と関わりを持っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人・御家族の希望のかかりつけ医に受診している。その際、ホームや訪問看護師とも連携をとっていけるように努めている。	現在、全入居者がホームの協力医をかかりつけとして月1回程度の受診や2週間に1度の往診を受けている。受診同行を家族に依頼することで入居者の状態把握や外出の機会としている。また、週1回の訪問看護には毎回、同じ担当者が来所し、入居者は顔なじみとなった看護師の支援を受け、職員が心配な点をその都度相談するなど、適切な医療支援が行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護師と連絡ノートなどで連携をとり、異変があった時は、電話にて状態報告・相談をしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時にホームでの情報提供を行っている。また、入院中には現状の確認に努めている。 日頃から、地域の勉強会等に参加し、関係づくりに努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	状態の悪化した際に、担当者会議を開催し、本人・御家族の意向の確認と関係者同士の連携と方針を話し合っている。 ホームスタッフでも、状態に合わせてケア会議を開催し、ケア内容の共有に努めている。	本人・家族の希望があればホームで対応することとして、「看取り指針」をもとに、終末期ケアについての説明をしている。本年度入居者の急な状態変化に伴い、対応の是非を検討し現在、協力医と内容を煮詰めながら『事前指定書』の作成に着手している。	高齢者の日常を支援するうえで、いつ何があっても適切な対応ができるよう、職員の日頃の気づきや家族との連携が重要と思われる。些細なことでもすぐに話し合いの機会を持ち、危機管理への職員の意識強化を期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	勉強会にて、学びの機会を作っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、消防避難訓練を実施している。行政と連携し、災害時は福祉避難所として協力体制を敷いている。行政より備蓄食糧の配給を受けている。	毎年2回の訓練を実施し、本年度は11月の自主訓練と3月の消防署指導による総合火災訓練を計画している。レトルト食品などを備蓄として準備しているが、有事の際には行政からの食品配布を受けることにしており、同時に福祉避難所として協力体制をとっている。	以前、地元消防団による建物内の配置や避難経路の確認が行われたが年月が経過しており、再度依頼して協力を仰ぐことも必要と思われる。また、台風時に限らず日頃の安全点検や、自然災害についても机上訓練などで職員の意識向上を図るなど今後の取り組みに期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	つつい、親しげに声を掛けてしまうこともあるが、スタッフ同士で話し合いながら、一人ひとりの尊厳を守れるような声かけと対応に努めている。	職員は入居者を苗字にさん付けで呼んでいるが、下の名前を呼ぶことで反応を示される方には、名前に対応している。管理者は長い付き合いであるからこそ、入居者への尊敬の念を忘れず、馴れ合いになってしまわないよう気づいた時や会議の中で話し合うよう心がけている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	二者択一で本人が混乱されないように配慮しながら、ご自分で決めて頂けるように促している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	できる限り、本人のペースに合わせて、支援していけるように努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	就寝時、起床時に着替えて頂き、メリハリをつけている。朝、更衣される時、自分で選べる方は、服を選んで頂けるように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食材切りや食事の盛り付け、片づけや食器拭きなど、できる範囲で手伝って頂いている。	その日の食材を見ながら早出の職員が昼食のメニューを決めている。買い物は地域商店を利用し、なるべく多くの食材を使って薄味に統一し、パンの日を取り入れたり、行事食は弁当に盛って提供するなど工夫している。下ごしらえや茶碗拭きには入居者も加わり、エプロン姿でお茶を注がれる方も自分の役割として生き生きと動かれている。職員も同席し、毎回同じ料理を摂ってる。	こぼしがちな方には家族と相談しながらタオルやエプロンでの対応である。エプロンについては、首周りに負担がないか確認しながらの使用を期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	できるだけ食材を多く提供するように努めている。 一日の食事量と水分量を記録し、一人ひとりの状態把握に努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、歯磨き誘導している。拒否があるときにも、時間を開けて再度声かけするなど、工夫している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりに状態に合わせて、トイレ誘導を行っている。夜間おむつやリハビリパンツ使用している方にも、日中は、トイレで排泄して頂けるように努めている。	日中はトイレでの排泄を基本としており、殆ど入居者が布下着に替えて過ごされるなど自尊心への配慮を心がけている。夜間帯にポータブルトイレを使う方がおられるが、その都度処理し日中の天日干しと共に入居者が気持ちよく使えるよう準備している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	朝食にはヨーグルトを食べて頂いている。便秘気味の方に散歩などの運動を促している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴表などを使用し、入居者みんなが公平に入浴できるように努めている。その日の状況や入居者の体調などを観察し、順番を変更している。	全入居が均等に楽しめるよう回数や順番などを入浴表に記録し対応している。週4～5回の入浴を支援しており、季節風呂や好みで入浴剤を利用してせかすことなくゆっくりと入ってもらよう努めている。	入居者の楽しみである入浴が週の殆どに支援されており、今後も継続した取り組みに期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	食事以外の時間には、入居者のお好きな場所でゆっくりして頂けるように努めている。訴えることが難しい方にも、ソファなどでくつろいでいただけるように努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の勉強会を行う際に、入居者の内服中の薬について話をしている。薬の変更があった時は、日勤リーダーに申し送り、事務所の申し送りノートを使用し情報の共有を図っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日頃、一人ひとりのしたいことをしてもらっている。時々、個別レクやグループでの体操を行い、気分転換を図っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	日頃の買い物や地域の行事などに出かけている。希望のある入居者の方と買い物や美容室などに出かけている。	近隣一帯がミカン畑であり、入居者は開花や色づき、収穫の様子など楽しみながら散歩を行っている。また、地域商店の利用や地元の祭りをはじめとした行事には可能な限り参加している。新年は県内外から参拝者が訪れる寺院へ出かけ一年の健康が祈願されている。今後も家族や地域の協力を得ながら身近な外出を支援していきたいと語ってる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金の所持したり使えるように支援している	ひとは自分で所持しており、買い物などの時はご自分でお支払いしている。他入居者は金銭管理が難しい為、ホームでお預かりしている。本人より希望があれば、預かり金から買い物などを楽しんでもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	御家族や知人から電話があった時には、取り次いでいる。個別に耳に受話器が当たっているかなどを確認し、スムーズに電話で話せるように配慮している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	移動しやすいように、家具などの配置を考えている。季節のものを掲示し、その時の季節感を出せるように努めている。	周りが自然いっぱいの環境であり、ホーム内は季節の飾り物などを工夫しながら共用空間を整えている。畳の間には仏壇が置かれており、花の水替えも入居者と一緒に行われている。管理者は職員の声や動きも大切な環境であることから、認知症である方々が不快や不穏にならないよう意識を持つことなどを指導している。玄関先には寒い時期に開花する桜が見られ、ホームを温かく包んでいるようであった。	10年の歳月で様々な物品も増えているようであり、今後は定期的に掲示物の破損や作り替える必要性など確認していくことも必要と思われる。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファを置いて、いつもの席から離れられる場所を作っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	御家族に協力してもらい、本人のなじみのある家具や道具を持ってきてもらっている。	昼食後自分の部屋を案内して下さった入居者が「ここは住みやすいですよ！」と笑顔で紹介されたことから、お気に入りの部屋となっていることが窺えた。起床後は、緑の樹木や畑の緑が安心感を与えているようである。持ち込みについては、管理者より説明がされており、家族へは何よりも居心地の良い環境を作っていきたいという思いが伝えられている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	動きやすいように段差や障害物を極力少なくしている。 家具やベッドの位置をできるだけ替えないようにし、見慣れた環境の維持に努めている。		